



特

イワクラサミット in 豊田

報告者 中根洋治

イワクラ学会全国大会2007 イワクラサミット in 豊田

〈内容概要報告〉

5月21日フォーラム

(総合司会) 平石知良

開会宣言 (事務局長 柳原)

今日がイワクラサミットの7回目で、学会が始まってから4回目ですが、これがずっと続くことを祈りつつここに開会の宣言をします。

開会挨拶 (会長 渡辺)

ラフな格好で済みません。明日、現地見学会へ行くものですから。

神社にある磐座は天然の岩が多いようですが、その他の巨石信仰には人が造ったものや人が運んできたものが多いと思います。イワクラ学会は学会というより「同好会」に近いという感じがしますが、学会では磐座を構築物と考え自然科学の対照として考えてみようと思っ

います。愛知磐座研究会の中

根さんは、「愛知発巨石信仰」という本も書いていますが、そこで信仰の対象としての磐座の多くは自然の岩と言っています。そうなる人文科学になり、学会ではそういう視点ではありません。

ここでは巨石信仰のありかたを期待したいと思います。

補足ですが、磐座は民俗学と結びついていて、もつと昔話や伝説と磐座を繋いだら高度なものになると思います。今回、中根さん達がどこまでやつてもらえるか、じっくり聞いて見たいと思います。

後援者 (愛知県・豊田市教育委員

員会・中日新聞社・全国歴史研究会) 代表挨拶 (豊田市教育委員会 笠井教育次長)

皆さんこんにちは

市長が来るべきですが、市長は所用で出張中ですので私が代わって歓迎の挨拶をさせていただきます。

まずもってこの磐座学会の全国大会「イワクラサミット in 豊田」が盛大に開催されますことをお祝い申し上げます。そして豊田市を会場に選んで頂き市民挙げて歓迎させて頂きます。

ここで豊田市の紹介をさせていただきます。ただいま、豊田市紹介のビデオを見て頂きましたが、2年前に周辺6か町村と合併し、人口は42万人（県下名古屋市に次いで2番目）・面積は900平方キロメートルで今までの3倍つまり愛知県の17%・北側は岐阜県と長野県に接しています。

豊田市の特徴は3つあります。①自然の緑が豊富、70%が山林で市の中央部を矢作川が流れている。②自動車産業の町、年間250万台生産されている。操業一日当たり毎日1万台生産されている。③東方の松平地区は徳川家発祥の地である。そして様々な歴史と文化に触れあえる町である。

こういう町へ全国から磐座を研

究されている方々が一同に介して日頃の研究成果の発表と議論をして頂いて大変意義ある学会が開かれ大変喜んでいきます。明日は豊田市の磐座を見て頂いて、民俗遺跡の新発見をして豊田市民にも刺激を与えてください。また豊田市の良いところを広く全国に発信して頂ければ有り難いと思います。

この大会を開催するにあたり、実行委員会の方々の大変な御労苦を重ねて戴き、その方々に対しても厚くお礼申し上げます。

最後にこのサミットの成功と、学会の発展を祈念いたしまして歓迎とお礼の挨拶とさせていただきます。どうも有り難うございました。

研究発表 (その1)

「です体」から「である体」に変えた

「石・岩の神秘的な力」

(岡山県 佐藤光範氏)

名古屋と岡山は言葉がよく似ているところがある。

中根さんが岡山へ磐座見学に来て交流ができた。中根さんの「愛知発巨石信仰」の本に私の関心のあることが書いてあったので本当に喜んでいる。

今日は、「石の神秘的な力」という話をしようと思う。先ほど会長の挨拶がありましたような学会の考えと、私の考えとは一寸違う立場にある。やはり石というのは神秘的な力があるからこそ拝まれてきたのではないか。

「磐座がおもしろい」、という本を書いたらすぐ売れた。が、古代(金属)地名の本はあまり売れなかった。

岡山では20年間毎月第3日曜日に磐座の調査してきた。このように磐座については皆さんに喜んで頂いている。

みなさん、イワクラはただ見るだけではだめ、こういう学会を作ってやっているかぎり、磐座が日本の歴史の中でどのように組み込まれていたか、磐座を拜んでいた人達はどういう人なのか、それが日本をどのようにして作ってきたのか、ということろまで入っていかなければ、考古学と並んでイワクラ学会が世に認められる存在にならないのではないか。このように憂いている次第である。

磐座いわくらという言葉はレジメにもあ

るように、日本書紀で初めて出て来る言葉である。磐座・磐境・神籬と書いてあり、それを拝んでいると書いてある。ニギノミコトが高天原へ舞い降りたときでも、磐座に拝んだとある。磐座は石とか大きな岩とは書いてない。磐座というのは拝まれるものである。播磨の風土記には、

磐の神様がアメノヒボコと戦って播磨の国を支配したとあるが、私は「磐の神様」ではなくて、磐を司る人が支配したのであると思う。

磐の中には二つの不思議な力がある。一つは悪霊を除く力、二つ目はその力を人間が受け取るうとする力である。

（以下映像と共に説明）

中根さんの本にもある岡山県の楯築遺跡は、弥生期の墳墓の上に5つの立石があり、その中心の祠の中にカネ石と称する弧帯紋の石が祀ってあったがあれは磐座ではない。悪霊から被葬者を守るためのものである。

死ということを人間は意識するの

で、磐というのは、死に対する除霊をするためのものである。

朝鮮半島北部の集安の積石塚、高松にも四世紀の積石塚がある。長野県須坂市のヨロイ塚古墳、奈良の巢山古墳などの葺き石は、土が崩れなためでなく、覆ったもの。最初の前方後円墳である箸墓古墳の葺き石は二上山から手渡しで運んだものとされている。モッコで運ぶというのは、三玉を運ぶように頭の上に載って運んだのである。そのように心から被葬者を守ったのである。東広島や神戸の五色塚古墳でも見られるが、天理の黒姫塚など、古墳の中の赤い朱とか鏡は、悪霊を追い払うものである。鏡の埋葬は被葬者が使っていた物ではなく、埋葬した人達が悪霊から守るために埋葬した物である。

神社の参道の玉砂利を踏んで歩くということは、古代から参拝者の悪霊が歩くことに抜けていくと、考えられた。そしてそういう参道を歩

く場合、中根さんの本の石巻神社にあるように、本来裸足で歩いたようである。

古墳の中でも石棚古墳という形式が日本に150ほどある。映像のように横穴式石室の上空に幾段もある桁や梁に見えるものは、樞原考古学研究所の河上さんは石室を支える力学的なものだと言っていたが、これも被葬者を悪霊から守るためのものである。なぜならこの写真のように只単に乗っかっているだけで、とても両側の壁を支えるようには見えないからである。岡山のオロギ4号墳、和歌山の岩橋山46号墳も同様な形式である。

奈良の猿石は齐明天皇の時に造られたという。これと同様なものがバリ島にあるというので見てきた。向こうの文化が伝わってきたのである。济州島のトラハルバンにもある。下腹が膨れてやはりオチンチンを隠しているの、これらはやはり生産に従事した猿石系統のものである。

これは济州島の支石墓だが、上の巨石は屋根ではなく、下に埋葬した被葬者を守っている石であろう。

盃状穴は石段に多く、次に手洗い、灯籠などにある。手洗いは神社に向かって左側にある。左側から奥にある磐座を3回見て回るというルールがある。

また盃状穴や手洗いの水で心まで清め、神様に悪霊がつかないようにしたようである。盃状穴とは、人工的に彫られた盃状の穴（セックスホールともいわれる）。

宮島の弥山には水溜まりがあつて、潮の干満で水位が上下すると言われる。本当であろうか。

神社にある沢山の灯籠は、そういうところを通ることによって悪霊が払われるのだ。

（秦氏が三輪神社を祀る。）

霊泉穴はそこに溜まった水で体を清めることによって不老長寿を願った道教的なもの。霊泉穴とは、こぶしが入るくらいの深さ20〜30cmの自然の穴。

讃岐富士の西側の「オジヨモ石」に向かつて綾の祖先の墓と神社が一直線になっている。アヤとは日本武尊の息子が吉備から四国へ渡り、アヤ氏となり阿野郡という地名もある。(日本武尊は吉備の人)

ここは豊川稻荷の近くだが、稻荷の元は伏見稻荷である。

711年に京都の太秦うずまさにいた伊呂具が伏見稻荷の磐座を拝んだ。そこは金属の産地だった。イナリのもとに稲荷と書くので農業の豊作の神となり、さらに商売繁盛の神などと変化した。

豊田市の猿投山(神社)の文字に猿という字があるが、サルは銅の産地であろう。猿田彦も銅の神様である。

岡山の大岩の麓に砂鉄がある。この大岩のお陰で鉄が出来た、と昔の人達は感謝して祠を建て拜んでいた。こういうのが磐座である。

他にイボが取れるという神社が各地にある。イボは瘡蓋かさふたつまりカサ

であり、カサというのは砂鉄を溶かすと言う意味。三輪神社や松尾神社と酒が関係づけられるが、あれはカサという言葉からサケを連想したわけで、製鉄と関係がある。別に酒を造っていたわけではない。

磐座学会の皆さんは日頃から磐座に関して疑問に思い、それを解いていつてほしい。ただ大きな岩に感心するだけではダメ。

愛知県には豊とよのつく地名が多い。トヨのトを注目すると、砥鹿神社(三河国の「一の宮」)のトは銅を意味する。トヨのヨは溶解のヨにながる。トヨというのは銅を溶かすと言う意味がある。

豊前国のタカハ(田河郡)に銅の採れる所がある。銅の神社もある。そこに秦氏が居た。その秦氏がこちらにも来たのではないかと思っている。

三河国の語源は、一般にチラシのように御川国みかわ、即ち矢作川のことだといわれるが、ミカワのカハというのは銅を溶かす所ということにな

る。秦氏がこちらに来たのではないかと思う。

磐座を調べていくと宗教にも突っ込んでいく。道教は不老長寿、仏教は輪廻(いいことをしているとまた生まれ変わる)、キリスト教は復活、ヒンズー教は蛇を磨り潰した液を呑めば死なないと信じた。どんな宗教も生きたいのだ。先日、山上仏教の話聞きに行った。そしたら、湖西市の大知波廃寺(愛知県境)の話が出た。それで、その付近に磐座がないか中根さんの「愛知発掘巨石信仰」で調べると、石巻山の磐座があった。

その南方の二川(ふたがわ)という所について、これは二本の川があったということではない。伊勢の二見浦も数字の二つとは関係ない。あそこに銅鉱石が見える。日光の地名も二荒山(ふたらさん)からきている。男体山は二荒山のことであり、あそこから銅が採れている。フタというの銅の産地である。

豊橋市中原町という地名がある

が、これにはビックリした。岡山の秦氏が居た所が「中原」という所だから。秦氏と関係深い神社は三輪神社と稲荷社である。稲荷社の中で磐座のないところもある。秦氏は子供が多かったから、全国に最も多い神社だ。宇佐神宮も秦氏が関係している。

研究発表 (その2)

「神奈備山イワクラ群の進化論的考察」

(江頭 務)

イワクラ (磐座) というと、

悠久の昔から存在し、不変のよう
に思われやすいが、果たしてそう
だろうか。もしそうでないとした
ら、イワクラは変遷するものであ
ること、つまりイワクラには古い
イワクラと新しいイワクラがある
ことを示す必要がある。

沖ノ島のイワクラ祭祀は、岩上
祭祀 (4世紀後半〜5世紀前半)

⇒岩陰祭祀 (5世紀後半〜6世紀
末) ⇒半岩陰・半露天祭祀 (7世
紀) ⇒露天祭祀 (8世紀〜10世
紀) と変遷したことは良く知られ
ている。つまり、沖ノ島のイワク
ラ群は、一時に成立したものでな

く、段階的に成立したことが考古
学的に証明されている。

ここで、神奈備山の代表的存在
である三輪山について考えたい。

三輪山に奥津イワクラ・中津イワ
クラ・辺津イワクラがあると聞
くと、巨大な三つのイワクラが山
頂・山腹・山麓にあるかのよう
に思われるが、大神神社発行の書籍
に掲載されたイワクラマップを見
ると、三輪山には多数のイワクラ
が全山に分布していることがわか
る。
これらのイワクラ群はその数の多
さから沖ノ島と同様に段階的に成
立したことが推定される。

では、どのようなステップを経
て成立したのだろうか？

①進化論的には、最初のイワクラ
は山頂にできたものと思われる。
私の趣味は登山であるが、山頂に
は特別な思いがある。

これは、一般の人にも共通の思い
だろう。特に、自然の猛威にさら
されている古代人にとってはなお
さらのことであろう。

古事記には、三輪山の山頂に祀ら
れた大物主神の有名な話がある。
これは海を照らしてよりくる神で
あり、太陽信仰である。現在、山
頂にある高宮の祭神…日向御子神
はその名残である。

この時期、纏向遺跡に本拠を置い
た三輪王朝によって、倭笠縫邑と
奥津イワクラにて太陽祭祀が行わ
れていたものと推定される。倭笠
縫邑は、現在の檜原神社とされ大
きな標柱が立てられている。昔、

檜原神社は日原神社とも呼ばれた。
これも太陽祭祀のなごりであろう。

②次に、山頂の奥津イワクラを麓
で遙拝するための辺津イワクラが
生まれる。この頃、山ノ神祭祀遺
跡と奥垣内祭祀遺跡が生まれてい
る。これらは、辺津イワクラ群の
一部である。

柳田国男は、『神体山では初め頂
上が聖地となり後に麓に移り里宮
となる』と述べている。また、『三
輪山においても元日の繞道祭に
先立ち、高宮において御神火拝戴
の儀がある。』

これも、奥津イワクラ⇒辺津イワ
クラの順である。
さらに、滋賀県の三上山のように
山頂にイワクラ(元宮)、麓に神社
(里宮)がある例は全国に多数分
布している。この時期は、ヤマト
王権が三輪から河内に移動した時
代であり、大陸との交流が盛んに

なった時代である。沖ノ島の祭祀はこの時期に始まっている。

③やがて、イワクラは全山に広がってゆく。これが、後世に中津イワクラと呼ばれるものである。

イワクラを生み出した当時の人々にとって、山の中腹を意味する中津イワクラの特別な意識はなかったものと思われる。これは、前述の大神神社のイワクラマップを検討すればわかる。中津イワクラはどれかと聞かれても答えようのないことは、大神神社自身も認めていることである。

この時期は、沖ノ島においては岩陰祭祀の時代であり、イワクラが急増している時期である。沖ノ島でイワクラ祭祀の対象となった岩石は、祭祀遺跡の変遷の分析から2個から10個に増大していることがわかる。

沖ノ島と三輪山のイワクラ祭祀は

初期ヤマト王権の管轄下にあり連動しているので、三輪山においてもイワクラが急増していたことが推定できる。

このことは、5世紀中頃の山ノ神祭祀遺跡の遺物の内容の変化としても表れている。遺物は、本物の剣・玉・鏡から、それらの滑石製模造品に変化している。つまりイワクラの増加は、遺物（奉納品）の簡略化、量産化をもたらしたと想像される。

④飛鳥の時代になると、人々は岩から離れ、禁足地にて山全体を拝むようになる。これはイワクラの一括祭祀であり、合理的であるが、一方、岩と対峙した古典的イワクラ祭祀の終焉を意味するものである。つまり、イワクラの生成は停止し、イワクラの固定化が行われる。これは、思想的には、文明の発展によるアニミズムからの離脱

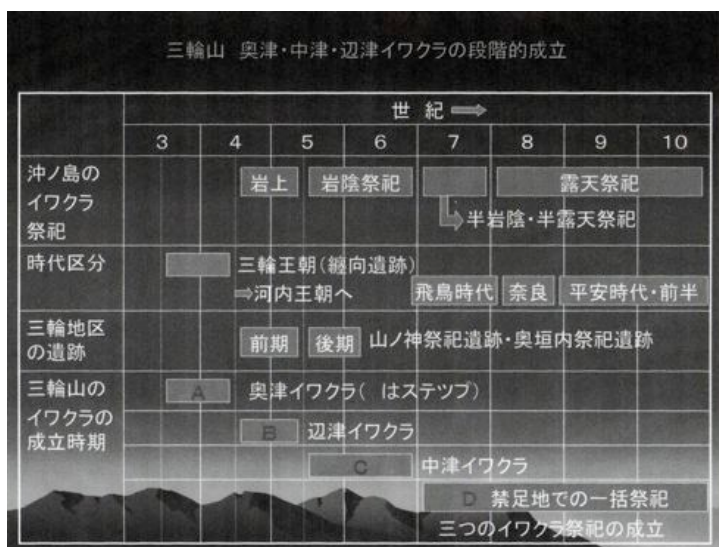
と説明される。

この頃、沖ノ島では、露天祭祀の兆候が「半露天・半岩陰祭祀」として現れ始める。この「露」の意味するところは、「岩から離れる」という意味であり、三輪山の状況と相通じるものである。

そして、三輪山のイワクラ群は社殿神道の影響のもと、沖ノ島との祭祀的な交流のなかで、教義上、奥津イワクラ・中津イワクラ・辺津イワクラに分類される。

以上の変遷をまとめたものが次の年表である。

イワクラは、時代の流れの中で生まれ消えてゆくものであり、常に人と共にあるものである。



パネルディスプレイ

(司会) 中根洋治

パネリスト

- ・ 渡辺会長
- ・ 佐藤光範氏
- ・ 江頭 務氏
- ・ 井上香都羅氏

まず「愛知の磐座」を映像と共に司会から説明する。

①三河一の宮である豊川市の砥鹿神社の奥宮は本宮山頂上近くにあり、その磐座の全体図である。通常磐座は天辺の「国見岩」といわれるが、最近気付いたことだが、国見岩の下方の岩の割れ目にある岩戸神社は女性を表し、国見岩は男性を表すのであろう。それだからこの本宮山が一層有名になったのだらう。(この岩場の南側は絶壁であり、殆ど天然の状態と思われる)

②猿投山の9合目付近にある西宮の上方に御舟石がある。2艘の舟である。東の宮の裏にも磐座と言われるものがある。これらの磐座について現在の豊田市史には記述がないが、昔の風土記などを見ると書いてある。こういう舟を御神体とする神社が大阪の交野市の磐船神社のように各地にある。これらは神様が舟に乗って来たことを表す、と考えられたようだ。

③尾張の犬山にある本宮山の御社根磐で、玉垣に囲まれた両側の岩の隙間に立石が立っている。姫の宮と呼ばれる所以であらう。この神社は大県神社と呼ばれ、尾張国二の宮とされる。

④鳳来寺山の岩壁で、岩壁信仰は県内に14箇所あり、愛知県の特徴と思われる。鏡岩といわれるものも沢山あるが、この鳳来寺山の岩壁も別名鏡岩と呼ばれ、屏風岩ともいわれる。岩壁信仰は、元来岩の上から今

まで自分の犯した罪を鏡に写して、その鏡を岩壁の上から投げ捨てることによって滅罪の所作をしたようである。そういう名残が現在各地の観光地で行われている「かわらけ」を投げる遊びだそう。後世になると岩壁の麓でお参りして帰るようになったらしい。

⑤東三河にある豊橋市内の石巻山で、9合目付近の山上社と麓の式内社とされる石巻神社がある。映像のように三角形の山の頂上に岩壁を有する磐座とも呼ばれる石灰岩の露頭がある。

岩壁の真ん中付近に弘法窟という洞がある。洞の中にこういう立石がある。豊田市岩倉町の岩屋とか岐阜県萩原町上四美の「こもり岩」の中にも立石が建てられている。石巻山の弘法窟の立石は天然のように見えるが、他の事例を考えると人工の要素が伺える。

⑥小牧山の環状列石。信長が小牧城

を作るとき、これには触れなかった。今でも20個余り残っている。石質はこの山のチャートで、列石の各々は角が削られているようだ。列石中央に台形状の天然の岩があった(歴史館を作るときに取り除かれた)。これから判断すると、この環状列石は通常の約4000年前の墓ではなく、中央の磐座に対する列石は磐境であったのではない。

⑦三尊形式の村積山に毒石がある。神霊石という伝説もある。昔は山頂の本殿前にあつたが、現在のように西側へ30mほど移動されたという言い伝えもあるようだ。それで現在の「毒石」は、玉垣で囲まれ細川氏の墓だといわれる。触ると祟りがあるといわれている。那須野ヶ原から飛んできた「殺生石」という伝説もある。

大分県の宇佐に「稲積山」という神体山がある。「積む」という言葉に何か値打ちのある意味が込められているのであろうか。日本のどこ

かに積善山とかいわれる山があるらしいが、ご存じの方は教えてほしい(携帯090-7957-4009中根)。

⑧足助の飯盛山頂上に四つほどの岩がかたまっている。細長い滑らかな岩なので運ばれたものと思われる。ここから経塚が発掘されていた。山の形状が飯盛状で、麓に足助八幡宮があり、町史に依れば山頂の磐座に対する神社とある。

⑨旧足助町大字岩神やがみには、若一神社の奥宮に当たるところに写真のよくな磐がある。ヤガミという発音はイワガミがなまったものではないそうで、昔の神聖な磐に対する呼び方らしい。

この大岩自体は天然の岩だが、南側の二本ある背丈ほどの立石は人工的に建てられたようだ。その南側は平坦な土地が伸びている。

(以上で「愛知の磐座」の紹介は終わる)

(司会)

次に会長の今までの感想をお願いします。

(渡辺会長)

今日の佐藤さんの話は、磐座は押まれる物であり、古墳などの装置の中には、悪霊から埋葬者を守る(除霊)目的のものがある、と言う話。江頭さんの話は、磐座の経過を論理的に説明した意義ある内容であった。

我々(柳原氏・平石氏・富田氏を含む)は磐座の分布をプロットしてどういう配置か、どういう意味をもっているか調べている。そして磐座は人工なんだ、と言う視点でやっている。自然の物もあることは分かるが。

(司会)

先ほど佐藤さんから、楯築遺跡の話が出ましたが、楯築遺跡の立石は磐境である。巨石信仰には主に磐座と岩神・磐境の3種類あると言われ

る。磐座は中心的存在であり、岩神はイボ取り、オコリ岩(高熱病が治るといわれる岩)、雨乞い岩・山の神・陰陽石などをいう。磐境はストーンサークルのように、その円の中側は神聖な所で、一般人のいる外側と境界を成す列石をいう。

ところが、岩倉市の場合、新溝神社墳丘墓の上に高さ80cmほどの川原石の列石があり、ここをイワクラ地名にしている。また、豊田市岩倉町の場合、陰陽石に見える遺跡のある地名を岩倉にしている。つまり、巨石信仰の種類は前記のようであり、磐座は鎮魂のために押んだ場所だと思っても、実際には巨石信仰の多くをイワクラと呼んで拡大解釈していたようである。

(司会)

次に磐座の出来た年代について、討論したい。何時頃から信仰されていたのかについて、今回の拙著「続巨石信仰」に記載した。磐座は元来自然の岩が多いと思うが、例えば三

輪山の天辺の奥津磐座と中津磐座については運びあげたものではないか、と思うようになった。理由は、三輪山の地山は中腹から黒色の斑糲岩はんれいがんだが、奥津・中津磐座は花崗岩に見えたから。運び上げた磐座は新しい(三輪王朝)。

江頭さんからお願ひしたい。

(江頭氏)

まず奥津磐座が運び上げられたかどうかについて、

三輪町出身の考古学者・樋口清之さんの論文では「三輪山の中腹以下は荒らされている。三輪山の磐座には3種類ある。一つは自然石、二つ目は大きな岩に比較的小さな岩をもたせかけているもの、三つ目はストーンサークル的なものがある」としている。私が見たところ、磐座を安定させるため下に小石が入れているものや、分散していた岩を集めたものが多いようだ。あくまでの自然石がベースである。結局、岩の転落を防止するような祭

場の保守のための工事はあったが、大きな石を麓から運び上げた可能性は小さい。

三輪山には神杉の信仰もあった。杉に神が降臨すると思われていた。ヒモロギとは、元来、木である。必ずしも大きな木とは限らない。神が杉の木から降りてきて座った座、これが磐座。

年代については、古代から集落があれば、それなりの祭祀はあったと考えられる。三輪族の三輪・金屋遺跡は縄文時代からあった。その近くにある現在の大神神社の禁足地は湿地帯で、二つの川の間挟まれた中州となっている。そこで、水神の祭祀が行われていたと推定される。禁足地の遺物の検討から、樋口さんも、祭祀は弥生以前から始まったとしている。しかし、これはあくまでも地方的な規模であり、王権の祭祀となると纏向に本拠をおいた三輪王朝の時代からと言える。

磐座信仰は出雲族の信仰だといわれている。出雲の人達が三輪山の

麓へ来たと言われている。天照大神に代表される天孫族は、九州から太陽信仰の思想を三輪山に伝えた。三輪族の祭神は国津神である。国津神の元々は、土地神である。それを、北九州から移動して来た天孫族がうまく吸収したのであろう。古事記の国譲りは、天孫族が出雲族(三輪族)を吸収した話となっている。

(司会)

縄文時代からというと、三輪王朝より前からということになる。

次は井上香都羅さんをお願いしたい。井上さんは大分県からお越しで、全国の巨石信仰・神体山(御室山)の研究者の第一人者だと思つて、学者では國學院大學の園田先生が最もオーソドックスだと思つて、井上さんの著書の中に「古代遺跡と神山紀行」という本があるが、これを見ると我々はもうこれ以上調べることが無いではないかと思つて、奥義を究めたものと思つて、その井上

さんに磐座が何時頃から信仰されていたかを聞きたい。

(井上氏)

九州から奈良・滋賀県・田原市の吉胡貝塚を経て来た。私は25才の時に、海上保安庁勤めで船の爆破事故により両足とも大腿から切断、義足で遺跡の現場に立つて調べた。250箇所銅鐸出土地へ行つて、崖でもよじ登り滑り降りて調べた。30年間保安庁に居て、昭和60年ころ、

あるお婆さんのことから御室山を調べることになった。それ以来、役所を辞め古代遺跡を執拗に調べている。通信教育で大学の史学科の勉強をした。

御室山は出雲と大和に多い。こういう信仰や政権は出雲から大和へ進出した。出雲の王家の一族みたいなのが卑弥呼で、出雲族のバックアップを受けて邪馬台国の首長になり、箸墓古墳に葬られたのではないか。

自著「銅鐸祖霊祭器説」という本は、銅鐸出土地からは神体山が見える、ということを書いた。神山には磐座や神社あるいは祠がある。地元のおじいさんに聞くようにしている。おばあさんではダメ。おばあさんは嫁に来て神山に登ったことがないからだ。

以前、全国の一宮巡りをしたこともある。祭神が「・・・の命」となっているが、あれはその地方の部族・豪族の祖霊を祀っている。神山信仰は祖霊信仰である。その祖霊信仰に銅鐸を使ったのではないか。銅鐸と丸い石が一緒に出た所もある。最初は石を依り代にして祖霊祭祀していたのではないか。その後銅鐸を使ったが、祖霊は神山から地下を通って来ると信じられたので、銅鐸は地中へ埋められたのであろう。銅鐸の出口を山の方へ向けている。それは祖霊を迎え入れるためのはずだ。

この行為は弥生時代より縄文時代まで遡るであろう。縄文時代は銅

鐸の代わりに石であったようだ。長野県の尖石遺跡は縄文期で、やはりその向こうに神山に相応しい八ヶ岳の主峰赤岳が見える。

旧石器時代でも、その時代の遺跡を調べると正面に神山が見える。外国はどうかと思つて中国・朝鮮へ行つてみると、西安の80万年前の遺跡では白い岩の見える神山が2箇所にあつた。こういう信仰、考え方はさらにどこかから来ているのである。その元はアフリカではないか。最終目的はアフリカである。神山・磐座信仰は旧石器時代からあつたと思う。

(司会)

磐座という言葉は、佐藤さんの話のように、

「日本書紀」にも記載され、かつ中臣氏の時代から現在まで続く祝詞のりとの中の「大祓詞」おほはらいのことばにもある。

(司会)

質問コーナーに入る。会場の方か

ら「磐座」という字は何故こんな字を書かか」という質問があつた。

(佐藤氏)

クラという言葉は、神代の時代(弥生時代)からあつた。岩波新書の本には、磐座は「岩の上の平らな所で神様が座る所だ」とあるが、こういう文字から解釈するのは間違ひである。

倉敷市の地名は一般には倉が多いかからというが、違ふと思う。クラはタカクラのようなクラだと思ふ。

ついでに井上さんから貝塚の話が出たから触れるが、貝塚は貝を集めて祭祀をする所。あの中から人骨が出て来るでしょ。だから貝塚はゴミ捨て場ではない。数千年間もそこで祭祀されたのである。縄文の貝塚に磐のある所があつた。磐座は縄文時代からあつた。ただし、縄文時代は磐座とは言わなかつた。磐座という言葉は弥生時代からである。4〜5世紀にできた。磐の中には神秘的な力がある。

会長の考えと私は大変違いがある。

(司会)

磐座は死者に対する鎮魂のもので、生きている人達の悪夢に出てこないよう、あるいは幽霊となつて出てこないよう願つた所であろう。もう一つの質問は「磐座に法則性があるか」ということについて。

(江頭)

磐座の位置に関しては、太陽の日の出線・日の入り線に關係するものがあることは良く知られている。

これも、太陽信仰を基底とした法則性のひとつと言えるだろう。六甲山にも、冬至の日の出線・日の入り線に關係すると思われる鏡岩・弁天岩の磐座がある。

三輪山と二上山も大和盆地の東西にあり、太陽の日の出・日の入りの位置にある。

また磐座のそばには、方向石と呼ばれる方位を示す石もある。

(佐藤)

一般に、この岩とこの岩を結べば日の出の方向だというものがあるという。先ほど榑築遺跡の墳丘墓は磐座ではないと言つた。イギリスのストーンヘンジも磐座ではない。なぜなら太陽を見る方向を定める道具であるからだ。磐座はその石を拝むもの。拝むものでなければ磐座と言えない。

会長の言われる、ポイントに磐座があると云うんだつたら、磐座学会は楽しむ「楽会」にした方が相応しい。

(渡辺会長)

世界の磐を見ると、太陽信仰の磐も拝んでいる。

(司会)

当初の磐座は天然の岩を拝んでいた。三輪山と二上山の天然の位置關係が、丁度日の出・日の入りだからそれを利用したということはあるであろう。それから、三輪山の奥津・中津磐座は斑糲岩の地山に花崗

岩の石の群れが集めてあるように見えた。こういう人工の磐座は新しいのであろう。また、明日見学の岩倉町の磐座は、天然の岩を素晴らしい男根にするために多少加工してあるようだ。

最後の質問は、「遺跡と開発について」

価値あるもの・重要なものは保存も考えたい。公共事業はみんなのためのもので、これも生活のために重要である。

(佐藤)

質問者は「芦が生えていて、鳥が飛んで来る池を道路計画で潰されるから困っている」といわれる。私の地元の例をあげる。出雲風土記に載る磐座を道路計画で撤去される寸前に、地元の方々の熱意で道路が地下を通るトンネルに変更された。奥さん頑張ってください。

(司会)

一寸待つて！ 私は道路建設の関係者だ。そういう重要なものは残すべきだ。しかし、質問の道路計画は新しい市民病院へ行く幹線道路だから、これも重要である。よく秤に掛けてやるべきであらう。

閉会挨拶

(中根洋治)

今日は大変遠くから、南は宮崎県から、北は千葉県からお越し頂き有り難うございました。この事業を進めるに当たり、愛知磐座研究会のみならず、全く磐座に関係のない方々にもボランティアでお手伝い頂きここまで来ました。明日の見学会もマイクロバスが順調に運びますようよろしくお願ひします。

「付記」 (中根)
今までのフォーラムに関することを付記する。

◎「三河国」の地名について。

「三河」とは3本の川のことではなくて、「御川国」であり、その元は「河」の国であった。この「河」は矢作川のことである。奈良時代の西暦713年に全国の地名は二文字の好字にするように統一された。それで当て字が多くなり、「御川」↓「三河」国になった。「カワ」の語源は分からない。

◎磐座の認定について。「愛知発巨石信仰」にも書いたが、**イ**地名が岩に関すること。**ロ**神社の真裏とか関係深い場所にあること。**ハ**岩に祠・石仏があること。

◎三輪山の磐座について。改めて確認してきた。

先回と違って快晴であったのでよく見えた。

A 岩質は、麓には花崗岩が見られる。三光の滝から上方へ向かうに従い、斑糲岩といわれる閃緑岩・花崗岩と同類の深成岩。中津・奥津磐座は地山と同質の斑糲岩である。

奥津磐座の表面は白く見えるが、斑糲岩である。

B 辺津・中津・奥津磐座は人工的に集められたものである(中・奥津磐座は在来の岩を含むであろう)。

C 奥津磐座の解説。奥津磐座は山頂にあり、付近を透かしてみても岩は少ない。だから奥津磐座は山頂付近から持ち運ばれ、積み上げたもの。形の悪い石は運んでいない。

所々に中心的岩があるが、ハッキリとした環状列石には見えない。丸っこい岩が多い。

D 中津磐座は参道付近に沢山ある。しめ縄のある岩群が磐座とすると、非常に多い。中でも60×30mほどの楕円形に縄で囲ってあるものが代表的である。これも大石

を中心にして拠点が沢山ある。大石の下には人工的に小石が挟んであるようだ。

中津磐座の最上方にある「樺の磐座」「龍神の磐座」と呼ばれる付近には、4つの大岩(長さ3m余)が同じ方向に並んでいる。明らかに人工的である。

E 結論。三輪山の磐座については、江頭さんの説明が妥当である。

◎ 磐座の経緯

フォーラムでもあったように、磐座は縄文時代からあった。在来日本の原住民が、磐座(天然の岩)を拜んでいた。

3〜5世紀に渡来人の関わる豪族・天皇が死ぬと、磐座(7世紀からの神社)の祭神となる例が多かった。この頃に多くの神々が生まれ祀られた。日本古来の神々は隅に追いやられたようである。

大陸から伝来の、稲作(2600年前)・文字・絵画・焼き物(須恵

器)・製鉄・鏡や玉造りなどの技術の中でも特に製鉄の技術に対し、日本原住民は頭が上がらなかつたと思われる。そうした技術者達が東征し、亡くなればその一族や住民が各神社の神と崇めた事が多かつたのではないか。

現地見学会

5月22日

5月22日マイク
ロバス3台に分乗して愛知のイワクラツアーの出発である。朝から雨模様で足元の悪さが気になるところである。それでも、総勢52名は元気に出発した。
見学したイワクラは次のとおりである。



岩上社
鬼の岩屋
白倉シンメイさん
足助の町(庚申堂の陰陽石)

真弓山国光稲荷
立岩の立岩
松平(徳川発祥の地)
岩倉町の磐座
野見山の神石

同時開催

「イワクラサミット豊田」

写真展

出展総数104点

出展人数7人

出展者名・出展数

中根洋治	18点
高尾宏道	31点
近藤 崇	43点
荻原哲郎	1点
藤野 健	5点
鈴木 功	4点
河合 孝	2点



中日新聞

2007年4月22日(日曜日) 朝刊 県内版

「イワクラ・サミット in 豊田」の記事



磐座を見直す目的で六年前から開かれ、全国から集まったイワクラ研究会の会員や市民など約百人が参加した。

全体会議では、三十年以上にわたって磐座の研究を続けている佐藤光範さん「岡山県倉敷市」が「石・岩の神秘な力」磐座を考える」と題して研究を発表。

各地の古墳や神社で見られる石をスライドで紹介しながら「古代から人間は石に除霊する力があると信じ、神聖なものとして見なしてきた」と指摘した。

磐座への信仰をテーマにしたパネルディスカッションや全国の磐座の写真展も同時に開かれた。

磐座とは仏教伝来前に、民俗信仰の対象となった石。山頂など人目につかない場所にある巨石が多いが、神社や古墳に置かれている石を指す場合もある。

豊田市では六十を越える磐座が確認されており、二十二日は市内を巡るフィールドワークがある。

(池田宏之)